

イチゴの促成型長期栽培試験

逸見 俊五*・須田十三男*・榎本 優*

1 ま え が き

福島県のイチゴ栽培面積は約300haで、そのうち施設栽培は約100haである。その主な作型は宝交早生を用いたパイプハウスでの半促成である。当地は東北の最南部に位置し、冬季間無雪、多日照の温暖な条件の下に約45haの施設イチゴがあり、一部では電照と加温を行なう促成栽培もみられる。

本試験は、花芽の分化期や発育が暖地と異なる東西南部における促成栽培の電照と地中加温の効果をみたものである。

2 試 験 方 法

- 1 供試品種 宝交早生
- 2 育苗期間 9月上旬～10月17日
- 3 定植 10月17日
- 4 栽植距離
2ベット(幅50cm×2)+中間通路20cmに30cm×20cmの4条植
- 5 処理区(第1表)
- 6 区制 N:16 P₂O₅:14 K₂O:14
堆肥 2000(kg/10a)を施した

第1表 処理区

処理区	地中加温	電 照	備 考
1	有	有	電照は白熱灯を用い20 Lux以上で日没直後から行い日長を16時間とし打ち切りは2月末日とする。
2	無	有	
3	無	有	上記の電照を1月延長し3月末日打ち切り
4	無	有	上記の照度で深夜10時～午前1時まで電照し打ち切りは2月末日とする。
5	無	無	

- 注. 1) 気温は簡易暖房機を用いて最低5℃を保持した。
 2) GA処理は10ppm, 1株5ccとし11月8日, 3月7日の2回処理した。
 3) 黒マルチあり
 4) 地中加温は, 12月11日より, 2月末日まで行った。

3 試 験 結 果

1 本作型は5℃以下の低温に遭遇させずに生育をつづけさせる, いわゆる無休眠の状態ですべて結実させる結

果をみたものである。

2 生育は無電照の場合, 葉数ははっきりしなかったが, 株張り, 最大葉ではかなり劣り, いわゆる「わい化」の現象がみられた(第2表参照)。

第2表 生育調査

調査月日	昭和50年 1月14日				昭和50年 3月11日				昭和50年 5月8日(収穫終了時)			
	株張り	葉 数	最大葉		株張り	葉 数	最大葉		全 重	株張り	葉 数	最大葉 葉柄長
			葉柄長	小葉長			葉柄長	小葉長				
	cm		cm	cm	cm		cm	cm	g	cm		cm
1	31.2	12.3	8.3	7.1	30.8	16.1	8.5	7.0	109.8	27.5	34.2	14.6
2	31.7	11.8	9.2	7.1	33.1	20.8	10.8	7.3	121.0	30.2	38.4	10.8
3	34.4	13.9	10.1	7.3	32.4	21.1	9.5	7.3	133.1	36.8	35.4	23.9
4	32.2	12.5	8.7	7.3	31.6	18.7	9.1	7.1	112.0	31.9	31.4	19.0
5	30.7	12.8	8.2	7.0	27.5	18.7	8.3	6.6	98.1	26.9	35.3	15.3

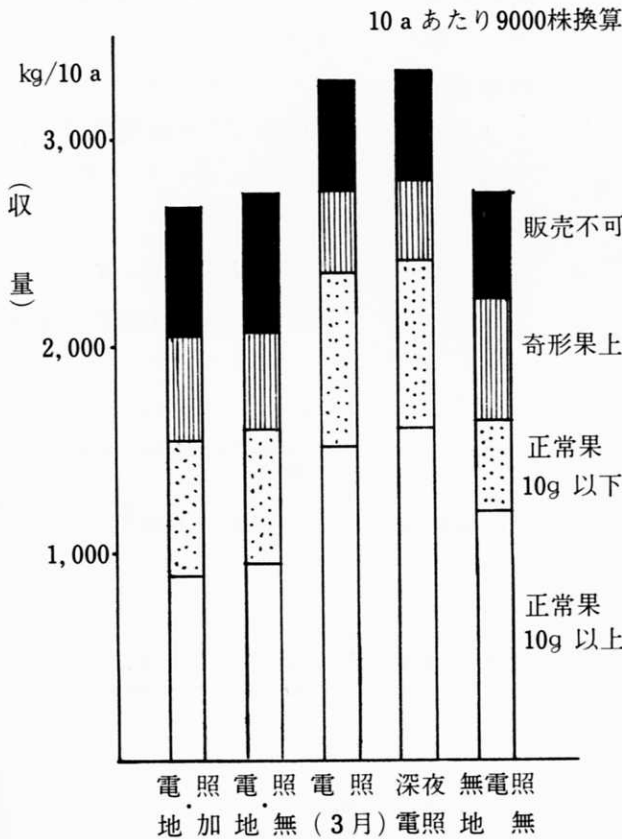
* Shungo HENMI, Tomio SUDA, Masaru ENOMOTO (福島県園芸試験場いわき支場)

3 時期別収量は1月末日までは電照効果ははっきりせず、むしろ無電照区がよかったが、2月・3月では電照区がすぐれ増収した。地中加温の効果も2月・3月になって現われている(第2図参照)。

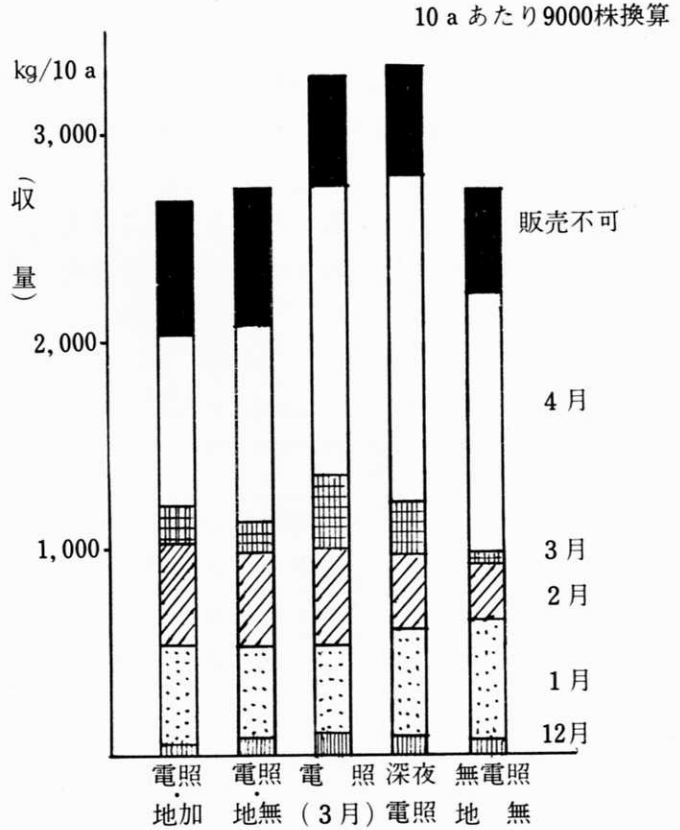
4 電照処理を3月末日まで延長した区は3月・4月の収量が増加した。なお深夜電照区が増収したこと

は、処理区をシルバーポリフィルムで仕切ったため、夜温が他区よりも1~2℃高く経過したことも一因と考えられる。

5 以上の結果、当地においても促成型長期栽培は可能と思われる。



第1図 品質別収量



第2図 時期別収量

イチゴ高冷地苗利用による電照半促成に関する試験

佐々木丈夫*・佐藤忠夫*・鈴木信隆*・和泉昭四郎*

1 ま え が き

宮城県では、イチゴの早出し栽培はダナーの株冷蔵半促成栽培が主体で2月下旬から6月下旬まで収穫が行われている。

さらに収穫期の前進をはかるため、高冷地育苗を行って花芽分化を促進し、電照処理による休眠打破およ

び山下げ時期について検討した。

2 試 験 方 法

供試品種はダナー、宝交早生を用いた。

栗駒町耕英(840m)で7月25日挿苗して育苗を行い、名取市高館の園試ビニールハウスに定植した。

苗の挿苗期から11月18日の電照開始期までの低温遭

* Takeo SASAKI, Tadao SATO, Nobutaka SUZUKI, Shoshiro IZUMI (宮城県園芸試験場)